

神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第5号 [2022年度]

教育実践研究論文

<第3類>

- ・幼児体育における教育内容の検討（2） (山本 章雄)
事例研究：計画立案における学生の留意・回避・行動意識について

<第6類>

- ・名画に挑戦！ (辻本 恵)
—初年次教育における協同制作の取り組み—

神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第5号【2022】

[教育実践研究論文]

<第3類>

- ・幼児体育における教育内容の検討（2）山本 章雄・・・ 5
事例研究：計画立案における学生の留意・回避・行動意識について

<第6類>

- ・名画に挑戦！辻本 恵・・・ 16
—初年次教育における協同制作の取り組み—

神戸教育短期大学「教育実践研究紀要」の発行および編集の手引き

1. 目的

本紀要は、大学教育に関する教育技術や方法論、教材活用等の知見を共有し、教育の質の向上に貢献することを目的として発行する。

2. 投稿者の資格

本紀要に投稿できるのは、原則として本学の、専任教員・本務校を持たない非常勤講師・職員とする。ただし、編集会議で認めた場合、学外からの寄稿を掲載することができる。

3. 編集会議

編集会議は、ファカルティ・ディベロップメント委員会（FD委員会）委員で構成する。

4. 原稿の内容、投稿

(1) 本紀要で扱うものは全て「教育実践研究」とし、その内容は以下に分類される。

第1類 大学教育の理念や思想に関するもの

第2類 大学教育の制度、法およびその運用に関するもの

第3類 大学における専門教育に関する方法、技術、課題に関するもの

第4類 大学教育に適した教具・教材の開発およびその利用効果に関するもの

第5類 大学生の心身の特性と教育のあり方に関するもの

第6類 その他、大学教育の実践に関するもの

(2) 書式は、編集会議において別に定めるものを基本とする。ただし、原稿の内容に応じ、適切な章立てを利用することができる。

(3) 1原稿につき本誌10部を無償提供する。

(4) 投稿は、原則として、電子ファイルによる完全イメージ原稿とする。

5. 投稿に関する手続き

(1) 文の構成は、「問題の所在（または目的）」「方法」「結果」「考察」「結論」を基本とするが、教育分野や論の特性に応じて適切な章立てを設定することができるものとする。なお、参考・引用文献等がある場合、必ず文末に付記する。

(2) 原稿は原則として、Microsoft Word（表作成についてはMicrosoft Excelも可）により作成し、完成イメージで提出する。この場合、編集会議が選定するフォーマットを利用することが望ましい。その他、文字数・行数・フォント等、執筆の詳細についてはフォーマットを参照のこと。

(3) 原稿は、完成イメージで5頁以上とし、最大15頁までとする。

(4) 写真、図については、各自が画像ファイルとして作成し、原稿内に貼り込むものとする。全てグレースケールで印刷されるため、出版時に画像の精細等に関する要求は一切受け付けない。ただし、カラー写真による掲載を希望する場合、自費（または個人研究費）により、載せることができる。

(5) 投稿にあたっては、電子メールに、投稿票、本文、写真・図の電子ファイルを添付し、FD委員会に送信する。

6. 編集に関する手続き

(1) 原稿が投稿されると、編集会議において1名のピアスーパーバイザー(PS)が決定される。

(2) PSは受稿後速やかに精読し、質問および意見をまとめ、投稿者に返信する。なお、PSが提示する意見や質問は、本誌が多様な読者を想定していることから、専門分野を熟知した内容でなくてよいこととする。

(3) 投稿者はPSから提示された質問や意見について、回答または修正等を行い、再び提出する。

(4) PSは回答または修正を確認し、「ピアスーパービジョン実施報告書」にコメント等、必要事項を記入の上、編集会議に提出する。

7. 発行

本紀要は、原則として、年2回発行する。ただし、発行は投稿数に応じて編集会議で決定する。

8. 著作権

著作権および電子化による公開本誌に掲載された著作物の著作権は執筆者に属するが、著作物は原則として電子化し、国立情報学研究所等の公的機関のホームページに公開することを許諾するものとする。ただし、執筆者から電子化を承諾しない旨の申し出があった場合はこの限りではない。

幼児体育における教育内容の検討（2）

事例研究：計画立案における学生の留意・回避・行動意識について

山本 章雄

YAMAMOTO Akio

幼児期における体育（身体活動）が果たす役割は多様であり、この活動を保育園やこども園で子どもたちに対し実施する保育者の教育に於いては、幼児体育をどのような内容で教授するかが重要な事柄となる。前回の研究¹⁾では、保育者を目指す学生の「幼児体育の目標意識」に関する調査を実施し、意識の脆弱さを結果として得ることができた。今回は実務的な内容である「幼児体育の計画立案」に焦点を当て、計画立案をする際の学生の意識を調査することにより、授業カリキュラム作成に向けての基礎資料を得ることを目的に研究を行った。

その結果、学生の意識は、年齢や発達に応じた計画を作成する方向、また、怪我や事故を回避する方向には向いていたが、動きの多様性確保、子どもたちが楽しむ、子どもの自主性涵養、保護者との連携に関しては希薄であることが示された。

キーワード：幼児体育、計画立案、留意意識、回避意識、行動意識、テキストマイニング

1. はじめに

幼児期における体育（身体活動）を至適に行うためには、指導する保育者に十分な知識と実践力の具備が求められる。知識に関して基本的で重要となる内容は、体育（身体活動）を行う「目標」に関する認識であり、この点に関しては文部科学省「幼児期運動指針」²⁾に、以下のような5項目にわたる記載が示されている。

- 1) 体力・運動能力の向上
- 2) 健康的な体の育成
- 3) 意欲的な心の育成
- 4) 社会適応力の発達
- 5) 認知的能力の発達

また、このような幼児体育の「目標」と社会状況の変化との関連に関する論考は多くの識者によって行われており、桐川³⁾は子ども達が十分に体を動かし、運動能

力の基礎を培い、丈夫な体と健やかな心を育むことが幼児体育に求められているが、子どもの体を動かす機会が減少した今日の状況では、保育者の質の高い援助と指導が求められており、運動の多様性を経験させ、子ども達自身が興味を持って自ら活動に取り組むことが必要であると述べている。

柳澤⁴⁾はこの点に関し、昔は外で遊び回ることによって運動・感覚機能が養われ、さらに大勢で遊ぶことが子ども同士のコミュニケーション発達を促し、一人一人の精神的発達に寄与していたが、現在では動かなくても遊べる環境となり、身体的、精神的、社会的に充足されず成長している実態があると指摘している。

このような社会情勢を反映した「幼児体育」の在り方については富本⁵⁾の論述もあり、現代の社会情勢により身体活動、特に仲間同士での屋外での身体活動の機会が減少傾向にあり、それによって年相応の発達が不十分で、能力が低下している。子どもにとっての運

動とは、楽しみながら行える「あそび」であり、これは内発的動機づけにより子どもが自由に行う意欲を持った活動として成立させるべきであると指摘している。また、その具体的な方策としては、体を思いっきり使う外あそびがやはり必須であり、自由な運動あそびは体力の向上ばかりでなく、社会性の強化、創造性、集中力の強化など様々な効果をもたらす。自由な運動あそびは、内容やルールが曖昧で自然発生的な活動であるが故に、仲間同士でルールを決め、役割分担を行うため大人の関与や干渉を必要としない。子どもの身体機能等の成長・発達は大が中心となって行うのではなく、子どもの「本能的活動欲求」に任せながら、大人はそれを見守り、あるいは喚起するような関わり方が必要であると述べ、幼児期の「あそび」の特性を含めながら身体活動の実施方法を示している。

青木⁶⁾は、子どもの身体活動に関する先行研究を整理し、子どもは体を動かすことで心臓・呼吸器系、骨格筋系、神経系や内分泌系を発達させ、筋力、持久力、スピード、パワーおよび柔軟性の能力を促進することが明らかになったと述べている。さらに体を動かす結果として、メンタルや自己概念、自尊感情および有能感等の精神的成長や、友達の感情や状態を的確に判断する能力、自分の意志や感情を上手に友達に伝える能力、ルールを守ること規範意識を持つことなど、社会的スキル等の成長にも関与していることが示されたとしている。また、意欲との関連性の可能性や脳機能や認知との関連、生活の自立、生活態度や性格形成等との関連性があると述べ、併せて、大人になってからの身体活動、健康状態と幼児期の身体活動の関連についても、子ども時代の身体活動の影響は、子ども時代の健康のみならず大人になってからの健康状態や身体活動に影響し、相互作用と持ち越し効果があると論じている。

一方前橋⁷⁾は、幼児の体育を幼児のための身体活動を通しての教育と捉えると、幼児体育は幼児を対象に各種の身体活動を通して、教育的角度から指導を展開し、運動欲求の満足と身体諸機能の調和的発達を図るとともに、精神発達を促し、社会性を身に付けさせ、心身共に健全な幼児に育てていく営み「人間形成」であると述べており、幼児体育が教育である以上、そのプロセスは系統化と構造化が求められ、幼児の実態を知り、指導の目標を立て、学習内容を構造化する指導法の工夫や検討が必要であると指摘をしている。また、都市化、夜型化した今日の生活環境の著しい変化に伴

った幼児の生活リズムの変調にも言及し、保護者や保育士自身が生活環境を整え、「健康」の理念を十分把握した視点から「幼児体育」を実施することの大切さについても論じている。

このような先行研究による多くの指摘を手掛かりに、保育者が備えておくべき知識と実践力について考えると、文部科学省「幼児期運動指針」が示す目標5項目を現場において達成するためには、現代社会の状況を十分に理解しこれに合致した活動内容を立案すること、子供たちの楽しむ気持ちを大切に考え自発性や自主性を育む活動を計画すること、また、心身の諸機能を発達させるためにはどのような活動が至適であるかを認識することが必須であると考えられ、「幼児体育の計画立案」における保育者の意識醸成を、大学教育のカリキュラムの中で如何に有効に形成していくかが重要な鍵となる。

今回の研究では、将来の保育者を目指す学生達に対し、幼児体育に関連した授業を実態に即した内容で実施するため、基礎的な情報として必須である学生の幼児体育計画における「留意事項に関する意識」(何に注意しながら計画を立案するか：以後「留意意識」と記す)、「回避事項に関する意識」(何を避けながら計画を立案するか：以後「回避意識」と記す)および「行動意識」(留意・回避事項を実現するためには、保育者にどのような取り組みが求められるか)について、現状を把握するため調査、分析、考察を行った。また、学生の留意・回避・行動意識の実態を文部科学省が示す「幼児期運動指針(ガイドブック)」⁸⁾の内容と比較することにより、意識の不十分や偏りを明確にし、授業カリキュラム作成に向けての基礎資料を得ることを目的とした。

調査は、個々の学生がどのような「留意意識」を持っているかを、実態(本音であり多様である意見)として抽出する立場を重視するため、選択回答による調査方法は採らず、自由記述によるアンケートを用い実施した。また、「回避意識」「行動意識」の調査においても、学生の主体的な考え方を把握することを目的に、自由記述による回答を求める形式で調査を実施した。

なお、アンケート調査の集計・分析に関しては、自由記述によって回答された学生の「留意意識」「回避意識」および「行動意識」の傾向を明らかにするため、「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の数値を用いて行うこととし、これらの数値を抽出できる「テキストマイニング」の手法を用いて検討を行った。

(ユーザーローカル：テキストマイニングツール)
(<https://textmining.userlocal.jp/>)

2. 方法

I. 調査の方法および集計について

「幼児体育」を受講している学生の「幼児体育計画における留意意識」「幼児体育計画における回避意識」および「幼児体育計画における行動意識」を明らかにするため、また、この結果と文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」等に示されている内容との比較検討を行うため、以下のようなアンケート調査を実施した。

- ・調査期間 令和4年1月26日～2月10日
- ・調査対象 K短期大学「幼児体育Ⅱ」受講学生80名
(内訳：一回生 男子10名・女子70名)
- ・調査方法 調査用紙による自由記述回答
学生には無記名で記述し成績評価にかかわらないことを説明し、同意の得られたうえで実施した。

・調査項目

「幼児体育計画における留意意識」

- ① 『保育者として幼児体育を計画する時、最も留意すべき事柄は何ですか?』
- ② 『なぜその事柄を大切にしているのですか?』

「幼児体育計画における回避意識」

- ③ 『幼児体育の計画において、最も回避すべき事柄は何ですか?』
- ④ 『なぜその事柄を回避しているのですか?』

「幼児体育計画における行動意識」

- ⑤ 『留意・回避事項を実現するためには、どのような取り組みが保育者に必要ですか?』

- ・集計分析 自由記述で得た記載内容を質問項目別にテキストデータとし、テキストマイニングツール(Social Insight社:UserLocalテキストマイニング)を用い集計と分析を行った。

II. 「留意意識」および「理由」について

学生が幼児体育の計画において何に留意しながら実施すべきと考えているか(留意意識)、また、その理由は何のような事柄であるかについての全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法を用い「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」を

算出することにより分析を行った。

III. 「回避意識」および「理由」について

学生が幼児体育計画において何を回避しながら実施すべきであると認識しているか(回避意識)、および、その理由について全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法による「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い分析を行った。

IV. 「行動意識」について

学生が幼児体育計画において留意する事項や回避する事項を達成するため、保育者にどのような取り組みが求められていると考えているか(行動意識)についての全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法により「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」を算出し分析を行った。

V. テキストマイニングの指標について

「単語出現頻度・スコア」

自由記述文書において出現する「単語」の頻度を「単語出現頻度」として回数を表記した。また、「スコア」は、一般的な文章で良く出現する「単語」(私は・である・となる等)は本研究において重要でないため重み付けを軽くし、逆に、研究対象文書に特徴的に出現する「単語」に重み付け(TF-IDF統計処理)を行った数値であり、これを「単語」の重要度尺度として表記した。

「係り受け解析・スコア」

自由記述文書における文節の、「名詞」に係る「形容詞」「動詞」「名詞」の「修飾-被修飾」の関係を抽出し、そこに使用されている「単語ペア」の出現回数を頻度として表記した。また、「スコア」は、総ての係り受け関係に対する当該係り受けの重み度を複合的に統計処理し算出した数値(TF-IDF処理を準用)で、係り受けの重要度尺度として表記した。

VI. 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較

学生の幼児体育計画における「留意意識」「回避意識」および「行動意識」が、文部科学省が示す「幼児期運動指針(ガイドブック)」の内容とどのように一致しているか、また、差異があるかを検討するため、「幼児期

運動指針(ガイドブック)」に示された項目を以下のよう
に整理し比較の対象とした。

① 幼児期における運動のポイント

- 1) 多様な動きが経験できるように様々な運動を取り入れること
- 2) 楽しく体を動かす時間を確保すること
- 3) 発達の特性に合った活動を提供すること

② 推進するための配慮事項

- 1) いろいろな活動の中で十分に体を動かすことができるように意識する
- 2) 自発的に体を動かして活動することができるように意識する
- 3) 安全に楽しく活動できる環境をつくることを意識する
- 4) 保護者と連携し、共に育てることができるよう意識する

3. 結果

I. 「留意意識」および「理由」について

学生の幼児体育立案における「留意意識」に関する意見の「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 1
であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表.
2である。これを見ると、単語出現数では、「考える」
(46)、「思う」(41)、「年齢」(39)、「出来る」(22)「大
切」(20)が多く、スコア(重要度)では、「年齢」(36.64)、
「子ども」(31.82)、「発達」(30.84)が高い値となっ
ている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「思
う—大切」(19)、「子ども—年齢」(9)、「年齢—合
う」(8)、「考える—大切」(7)、「実施—大切」(7)の係り
受けが多く出現し、スコア(重要度)では、「思う—大
切」(9.05)、「年齢—合う」(4.80)、「子ども—年齢」
(2.25)に於ける数値が高い値となっている。

また、「留意意識」の「理由」における「単語出現頻
度・スコア」を示したものが表. 3であり、「係り受け
解析・スコア」を示したものが表. 4である。これを見
ると、単語出現数では、「子ども」(103)、「思う」(95)、
「出来る」(93)、「年齢」(63)、「考える」(50)が多く、
スコア(重要度)では、「子ども」(35.81)、「子どもた
ち」(33.93)、「発達」(31.31)、「年齢」(30.66)が極
めて高い値となっている。また、「係り受け解析・スコ
ア」を見ると、「思う—大切」(18)、「年齢—合う」(12)、
「子ども—年齢」(9)、「子どもたち—出来る」(8)、「年

齢—合わせる」(6)「年齢—発達」(6)の係り受けが多
く出現し、「年齢—合う」(7.43)、「思う—大切」(3.56)、
「年齢—合わせる」(3.00)「興味—持つ」(3.00)に於
ける重要度が高い数値となっている。

II. 「回避意識」および「理由」について

学生の幼児体育立案における「回避意識」に関する
意見の「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 5
であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表.
6である。これを見ると、単語出現数では、「思わない」
(32)、「避けない」(26)、「出来ない」(22)、「子ども」
(19)、「年齢」(18)、「立案」(18)、「実施」(17)、「危
険」(17)が多く、スコア(重要度)では、「保育者」(37.02)、
「実施」(34.37)、「子どもたち」(16.94)、「子ども」
(12.95)、「危険」(11.51)が特に高い値となっている。
また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「実施—避
けない」(17)、「立案—避けない」(13)、「実施—出来
ない」(10)、「立案—出来ない」(9)、「年齢—合わない」
(8)の係り受けが多く出現し、「実施—避けない」
(6.95)、「年齢—合わない」(6.00)、「立案—避けない」
(4.14)、「実施—出来ない」(4.07)、「立案—出来ない」
(3.33)「危険—伴う」(3.00)に於ける重要度が高い
数値となっている。

また、「回避事項意識」の「理由」における「単語出
現頻度・スコア」を示したものが表. 7であり、「係り
受け解析・スコア」を示したものが表. 8である。これ
を見ると、単語出現数では、「思わない」(99)、「子ど
も」(93)、「考えない」(56)、「怪我」(49)、「出来ない」
(48)が極めて多く、スコア(重要度)では、「保育者」
(41.60)、「子ども」(39.97)、「子どもたち」(35.19)
「怪我」(31.86)が非常に高い値となっている。ま
た、「係り受け解析・スコア」を見ると、「年齢—合
わない」(10)、「怪我—する」(10)、「大切—思わない」(8)
「怪我—事故」(6)、「子ども—出来ない」(5)、「大切
—考えない」(5)の係り受けが多く出現し、「年齢—合
わない」(7.86)、「子ども—出来ない」(5.21)、「怪我
—事故」(4.33)、「安全—配慮」(3.65)に於ける重要
度が高い数値となっている。

III. 「行動意識」について

学生の幼児体育計画における保育者の取り組みに関
する意見(行動意識)の「単語出現頻度・スコア」を
示したものが表. 9であり、「係り受け解析・スコア」
を示したものが表. 10である。これを見ると、単語出

表. 1 「留意意識」の「単語出現頻度・スコア」
(上位20位まで)

順位	単語	出現頻度	スコア
1	考える	46	5.84
2	思う	41	0.95
3	年齢	39	36.64
4	出来る	22	0.61
5	大切	20	4.85
6	子ども	15	31.82
7	運動	15	7.93
8	発達	14	30.84
9	合う	14	1.63
10	安全	12	8.31
11	楽しい	10	0.23
12	実施	8	0.38
13	事柄	6	1.75
14	楽しめる	6	0.99
15	合わせる	6	0.62
16	行う	5	0.30
17	応じる	4	2.78
18	難しい	4	0.13
19	出来る	4	0.04
20	使う	4	0.04

表. 3 「留意意識・理由」の「単語出現頻度・スコア」
(上位20位まで)

順位	単語	出現頻度	スコア
1	子ども	103	35.81
2	思う	95	5.07
3	出来る	93	10.63
4	年齢	63	30.66
5	考える	50	6.88
6	内容	40	21.23
7	子どもたち	39	33.93
8	発達	35	31.31
9	運動	31	29.04
10	楽しい	28	1.80
11	遊び	28	12.44
12	大切	26	2.67
13	段階	24	13.96
14	合う	20	3.28
15	持つ	18	1.87
16	動かす	13	7.44
17	成長	13	4.36
18	合わせる	13	2.78
19	出来る	9	0.11
20	興味	5	0.27

表. 2 「留意意識」の「係り受け解析・スコア」
(上位10位まで)

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	思う—大切	19	9.05
2	子ども—年齢	9	2.25
3	年齢—合う	8	4.80
4	考える—大切	7	1.19
5	実施—大切	7	0.79
6	事柄—大切	6	1.62
7	運動—行う	3	0.86
8	発達—合う	3	0.80
9	子ども—出来る	3	0.52
10	立案—思う	3	0.29

表. 4 「留意意識・理由」の「係り受け解析・スコア」
(上位10位まで)

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	思う—大切	18	3.56
2	年齢—合う	12	7.43
3	子ども—年齢	9	1.41
4	子どもたち—出来る	8	0.77
5	年齢—合わせる	6	3.00
6	年齢—発達	6	1.17
7	興味—持つ	5	3.00
8	子ども—成長	5	2.00
9	年齢—段階	5	2.00
10	発達—合う	5	1.43

表. 5 「回避意識」の「単語出現頻度・スコア」
(上位20位まで)

順位	単語	出現頻度	スコア
1	思わない	32	0.58
2	避けない	26	2.93
3	出来ない	22	1.37
4	子ども	19	12.95
5	年齢	18	9.17
6	立案	18	4.74
7	実施	17	34.37
8	危険	17	11.51
9	怪我	15	9.51
10	合わない	11	1.02
11	保育者	10	37.02
12	子どもたち	10	16.94
13	遊び	10	1.75
14	運動	9	3.06
15	行う	9	0.33
16	安全	8	3.88
17	考えない	8	0.08
18	楽しくない	6	0.08
19	難しい	4	0.13
20	良くない	4	0.01

表. 6 「回避意識」の「係り受け解析・スコア」
(上位10位まで)

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	実施—避けない	17	6.95
2	立案—避けない	13	4.14
3	実施—出来ない	10	4.07
4	立案—出来ない	9	3.33
5	年齢—合わない	8	6.00
6	危険—伴う	3	3.00
7	怪我—事故	3	1.50
8	内容—考えない	3	0.52
9	大切—思わない	3	0.36
10	運動—動き	2	2.00

表. 7 「回避意識・理由」の「単語出現頻度・スコア」
(上位20位まで)

順位	単語	出現頻度	スコア
1	思わない	99	5.50
2	子ども	93	39.97
3	考えない	56	8.58
4	怪我	49	31.86
5	出来ない	48	2.89
6	行わない	30	3.54
7	子どもたち	29	35.19
8	内容	28	10.95
9	避けない	26	22.85
10	危険	24	21.22
11	保育者	22	41.60
12	大切	22	9.93
13	安全	21	21.73
14	年齢	21	12.17
15	活動	21	10.93
16	運動	19	12.20
17	体育	17	24.09
18	実施	16	29.89
19	感じない	15	1.21
20	合わない	13	1.41

表. 8 「回避意識・理由」の「係り受け解析・スコア」
(上位10位まで)

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	年齢—合わない	10	7.86
2	怪我—する	10	1.34
3	大切—思わない	8	0.72
4	怪我—事故	6	4.33
5	子ども—出来ない	5	5.21
6	大切—考えない	5	0.30
7	安全—配慮	4	3.65
8	マット—敷かない	4	1.36
9	怪我—思わない	4	1.82
10	内容—出来ない	4	0.77

表. 9 「行動意識」の「単語出現頻度・スコア」
(上位20位まで)

順位	単語	出現頻度	スコア
1	子ども	78	38.15
2	思う	78	3.43
3	考える	69	12.87
4	出来る	54	3.64
5	保育者	41	41.45
6	子どもたち	41	38.00
7	年齢	41	30.96
8	発達	29	35.36
9	大切	27	14.50
10	運動	24	18.53
11	遊び	21	7.25
12	楽しい	21	1.02
13	必要	20	25.48
14	知る	17	0.73
15	理解	16	3.83
16	楽しむ	14	1.14
17	難しい	11	0.96
18	合う	10	1.67
19	現実	10	0.14
20	事柄	8	0.24

表. 10 「行動意識」の「係り受け解析・スコア」
(上位10位まで)

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	思うー必要	16	3.44
2	思うー大切	8	0.91
3	現実ー事柄	7	2.67
4	年齢ー合う	6	3.00
5	取り組みー必要	6	0.75
6	保育者ー必要	6	0.75
7	年齢ー応じる	5	3.75
8	授業ー行う	5	1.67
9	内容ー考える	5	0.43
10	必要ー考える	5	0.43

現数では、「子ども」(78)、「思う」(78)、「考える」(69)、「出来る」(54)、「保育者」(41)「子どもたち」(41)、「年齢」(41)が極めて多く、スコア(重要度)では、「保育者」(41.45)、「子ども」(38.15)「子どもたち」(38.00)「発達」(35.36)、「年齢」(30.96)が非常に高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「思うー必要」(16)、「思うー大切」(8)、「現実ー事柄」(7)、「年齢ー合う」(6)、「取り組みー必要」(6)「保育者ー必要」(6)の係り受けが多く出現し、スコア(重要度)では、「年齢ー応じる」(3.75)、「思うー必要」(3.44)、「年齢ー合う」(3.00)「現実ー事柄」(2.67)に於ける数値が高い値となっている。

IV. 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較

学生の幼児体育計画における「留意意識」「回避意識」および「行動意識」と文部科学省が示す「幼児期運動指針(ガイドブック)」の内容との比較検討の結果については、「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い検討された学生の意見や考え方の結果を用いながら対比する必要があるため、後述の4、考察:IV. 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較において、結果および考察を合わせて記載することとする。

4. 考察

I. 「留意意識」および「理由」について

留意意識の単語出現頻度を見ると、「考える」「思う」の出現数(合計87)が多く、また、「年齢」(39)、「出来る」(22)の単語出現頻度も多くなっている。このことから学生達は幼児体育の計画に於いて、対象となる子どもの年齢に留意し、発達段階に応じた内容を立案することが大切であると認識していると考えることが可能である。また、スコア(重要度)においても、「年齢」(36.64)、「発達」(30.84)が高い値を示し、「子ども」(31.82)の数値も大きくなっていることより、子どもたちの発達や年齢に留意しながら、活動計画を立てることの大切さを認識していることがうかがえる。この傾向は「係り受け解析・スコア」にも顕著に現れており、「思うー大切」(19)、「子どもー年齢」(9)、「年齢ー合う」(8)の出現頻度が高くなっており、また、スコアにおいても「思うー大切」(9.05)、「年齢ー合う」(4.80)、「子どもー年齢」(2.25)の重要度が高い数

値を示していることより、上述の学生の意識を推察することが可能であると言える。

一方、理由の結果を見てみると、単語出現頻度において「子ども」(103)、「思う」(95)、「出来る」(93)の出現数が極めて多く、スコア(重要度)でも「子ども」(35.81)、「子どもたち」(33.66)、「発達」(31.31)、「年齢」(30.66)の数値が非常に高い値を示している。これは、学生たちが体育活動立案時の留意事柄として、活動の主体である子どもたちを最も大切にし、その様態を的確に判断する態度が必要であると考えている状況が強く示されたものと思われる。また、「係り受け解析・スコア」をみると「思うー大切」(18)、「年齢ー合う」(12)、「子どもー年齢」(9)、「子どもたちー出来る」(8)の出現回数が多く、スコアにおいても「年齢ー合う」(7.43)、「思うー大切」(3.56)、「年齢ー合わせる」(3.00)、「興味ー持つ」(3.00)の数値が高くなっており、学生は留意事項を考えるにあたって、子どもたちを注目することの大切さを最も重要視している様子が示されたといえる。

上記のように、学生たちの多くは幼児体育の計画において、活動の主体である子どもたちにしっかりと着目し、その年齢や発達段階に応じた計画を作成することが、最も重要な留意点であると認識している状況が明らかになった。

II. 「回避意識」および「理由」について

回避事項意識の単語出現頻度を見ると「思わない」(32)、「避けない」(26)、「出来ない」(22)が出現頻度の上位に入っている。これらの単語は、留意意識で多く出現した単語「考える」「思う」「出来る」の反対の意味を持った言葉であり、幼児体育計画の際の回避意識として、対象となる子どもの年齢に留意せず、発達段階に応じた立案を行わないことを、学生たちが認識している状態を示すものと考えられる。また、スコア(重要度)では、「保育者」(37.02)、「実施」(34.37)と合わせて「危険」(11.51)が高い値を示しており、保育者は幼児体育の計画において、危険である活動の実施を避けるべきであると考えている学生の意識が示されているものと思われる。「係り受け解析・スコア」をみると、「実施ー避けない」(17)、「立案ー避けない」(13)、「実施ー出来ない」(10)、「立案ー出来ない」(9)、「年齢ー合わない」(8)が高い数値となっており、ここでも留意意識の裏返しとしての考え方である、子どもたちの年齢に合わない体育活動の計画は避けるべきであ

るとする意識が、学生に保持されていると推察することができる。

理由の結果を見ると、「思わない」(99)、「子ども」(93)「考えない」(56)、「怪我」(49)、「出来ない」(48)が単語出現頻度で高くなっており、怪我を引き起こすような子どもが出来ない計画を考えること、子どものことを考えない計画を立てることが、回避意識の理由として学生から強く支持されていることが現われたものとして理解することが可能である。一方、スコア(重要度)においては、「保育者」(41.60)、「子ども」(39.97)、「子どもたち」(35.19)、「怪我」(31.86)が高い値となっており、保育者が怪我を伴うような活動を子どもたちの体育において計画することも、回避理由の背景に存在することが示されており、学生たちの回避意識の基盤に、子どもたちの体育活動においては絶対に「危険な状況」や「怪我」があってはならないと考える実態があることが明らかになったと言える。理由における「係り受け解析・スコア」をみると、「年齢ー合わない」(10)、「怪我ーする」(10)、「大切ー思わない」(8)、「怪我ー事故」(6)が多く出現しており、年齢に合わない計画の立て方、怪我や事故を誘発する計画の立て方が、学生の回避意識の理由基盤となっており、また、スコア(重要度)においても「年齢ー合わない」(7.86)、「子どもー出来ない」(5.21)、「怪我ー事故」(4.33)、「安全ー配慮」(3.65)が大きな数字となっていることより、同様の傾向が示されていると考えることができる。

以上のように、幼児体育立案における学生たちの回避意識および理由は、子どもたちの現状や年齢に配慮せず、危険で怪我や事故を誘発する可能性のある計画を立てるべきでないという認識に向けられており、留意意識と表裏の関係にあることが認められた。

III. 「行動意識」について

留意意識・回避意識の実現のため保育士に求められる取り組みについて(行動意識)単語出現頻度を見ると、「子ども」(78)、「思う」(78)、「考える」(69)、「出来る」(54)の頻度が多くなっており、また、スコア(重要度)も「保育者」(41.45)、「子ども」(38.15)、「子どもたち」(38.00)、「発達」(35.36)において数値が高くなっている。この傾向は、留意意識における単語の出現頻度およびスコア(重要度)の高い単語の様態とほぼ同じであり、学生は、行動意識においても対象となる子どもの年齢に留意し、それぞれの子ども

の発達段階をしっかりと把握することが、計画実現の上で重要な取り組みであると認識している状況が示されたものと考えられる。また、「係り受け解析・スコア」をみると、「思う—必要」(16)、「思う—大切」(8)、「現実—事柄」(7)、「年齢—合う」(6)、「取り組み—必要」(6)「保育者—必要」(6)の係り受けが多く出現しており、ここでも、留意意識における解析とほぼ同様の結果が示されており、学生の行動意識が子どもたちの年齢、発達段階を十分に把握する方向に向いていることが明白になった理解することができる。また、スコア(重要度)においても、「年齢—応じる」(3.75)、「思う—必要」(3.44)、「年齢—合う」(3.00)「現実—事柄」(2.67)の数値が高い値となっており、活動の主体である子どもたちを最も大切に考え、その様態を的確に判断し行動することが保育者に求められていると考えている、学生の様子が示されたものと推察できる。

上記のように、学生の「行動意識」は「留意意識」とほぼ同じ傾向を示していた。これは学生が「留意意識」(何に注意しながら計画を立案するか)と「行動意識」(留意・回避事項を実現するためには、保育者にどのような取り組みが求められるか)の違いを認識できておらず、指導の手続きとして留意と行動は段階が違うという論理的な識別が未熟であるため、これらを同様な行為であると理解し回答をした可能性があると考えられる。本研究の目的からは乖離するが、幼児体育の授業カリキュラム作成において、こうした面への教育も必要であることが示唆されたと理解することが可能である。

IV. 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較

学生の幼児体育計画における「留意意識」は、『活動の主体である子どもたちにしっかりと着目し、その年齢や発達段階に応じた計画を作成することが、最も重要である。』と捉えることができた。また、「回避意識」においては、『子どもたちの現状や年齢に配慮せず、危険で怪我や事故を誘発する可能性のある計画を行うべきでないという認識に向けられており、留意意識と表裏の関係にある。』状況が示された。一方、「行動意識」においては、『学生の行動意識は留意意識とほぼ同じ傾向を示しており、学生に「留意意識」と「行動意識」の手続き的な違いを教育する必要がある。』ことが示唆された。

これを、2. 方法 IV. 文部科学省「幼児期運動指針

(ガイドブック)」において整理した項目と比較すると、次の点が明らかになると考えられる。

① 幼児期における運動のポイント」との比較

- 1) 多様な動きが経験できるように様々な運動を取り入れること
- 2) 楽しく体を動かす時間を確保すること
- 3) 発達の特性に応じた活動を提供すること

上記の1)から3)に記載されている内容と学生の各意識の結果を比較すると明らかな差異を見出すことができる。それは、1) 多様な動き、経験、運動を取り入れる、2) 楽しく体を動かす、といった留意意識、行動意識を「幼児期運動指針(ガイドブック)」では求めているが、今回の調査結果ではこのようなポイントに関する学生の意識が希薄であったという点である。これは、学生たちが子どもたちの年齢や発達状況を強く意識し計画を立案すれば良いとする偏った留意意識、行動意識を保持しており、幼児体育の計画において重要である「動きの多様性」また、「子どもたち自身が楽しむ」といった幅広い視野に意識が向いていないことを示唆していると考えることができる。

一方、3) 発達の特性に応じた活動を提供すること、に関しては、学生の「留意意識」において、活動の主体である子どもたちにしっかりと着目し、その年齢や発達度合に応じた計画を作成することが最も重要であると意識していることが認められ、また、「行動意識」においても同様な認識が顕在していたことより、この項目における学生の認識は、保育者を目指す者として適格であると判断ができる。

② 推進するための配慮事項」との比較

- 1) いろいろな活動の中で十分に体を動かすことができるように意識する
- 2) 自発的に体を動かして活動することができるように意識する
- 3) 安全に楽しく活動ができる環境をつくるよう意識する
- 4) 保護者と連携し、共に育てることができるよう意識する

上記の1)から4)に記載されている内容と学生の各意識の結果を比較すると次のような違いを見出すことができる。それは、1) いろいろな活動の中で十分に体を動かすことができるように意識する、2) 自発的に体を動かして活動ができるよう意識する、および、4) 保護者と連携し、共に育てることができるよう意識する、といった配慮事項を「幼児期運動指針(ガイド

ブック)』では求めているが、今回の調査結果ではこのような事項に関する学生の意識がほぼ見当たらなかったという点である。学生たちは、現場での指導経験も皆無に近く保育現場の状況を知らないという現況があるため仕方ない結果であると考えられるが、今後の保育を担う者としては、「子どもたちが自発的に活動を行う。」また、「保護者との連携を密にする。」といった認識は必須の事柄であり、このような事項に関する授業カリキュラムの必要性が明示されたと理解ができる。なお、3)安全に楽しく活動ができる環境をつくるよう意識する、に関しては、「回避意識」の結果にこの項目に関する内容が含まれており、危険で怪我や事故を誘発する可能性のある計画を行うべきでないという認識が学生たちに具備されていることが明らかになっており、この項目における学生の認識は、保育者を目指す者として担保されているものと判断することができる。

4. ま と め

将来の保育者を目指す学生達に、幼児体育の授業を実態に即した内容で行うため、基礎的な情報として必須である「学生の幼児体育計画における留意意識(何に注意しながら計画を立案するか)」「学生の幼児体育計画における回避意識(何を避けながら計画を立案するか)」および「学生の幼児体育計画における行動意識(留意・回避事項を実現するためには、保育者にどのような取り組みが求められるか)」がどのような状況にあるかを知るため、自由記述による意見調査を行い以下の結果を得た。

また、調査によって明らかになった、学生の留意意識等の実態を文部科学省が示す「幼児期運動指針(ガイドブック)」の内容と比較することにより、学生の幼児体育立案における留意意識等に欠落や偏りがないかの検証を行い、授業カリキュラムの作成に向けて以下の示唆を得ることができた。

(1) 幼児体育計画における学生の「留意意識」は、『活動の主体である子どもたちにしっかりと着目し、その年齢や発達度合に応じた計画を作成することが、最も重要である。』と認識している実態があることが明らかになった。

(2) 幼児体育計画における学生の「回避意識」は、

『子どもたちの現状や年齢に配慮せず、危険で怪我や事故を誘発する可能性のある計画を行うべきでないという認識であり、留意意識と表裏の関係にある。』ことが認められた。

(3) 幼児体育計画における学生の「行動意識」は、「留意意識」とほぼ同様な状況であった。

(4) 学生は「留意意識」と「行動意識」との違いが識別出来ておらず、授業カリキュラムにおいて、こうした面への教育が必要であることが示唆された。

(5) 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較において、学生の「留意意識」は、子どもたちの年齢や発達段階を考えるだけで計画を立案すれば良いといった偏った傾向にあり、動きの多様性、また、子どもたち自身が楽しむといった幅広い視野に意識が向いていないことが示された。

(6) 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較に於いて、学生の「留意意識」は、子どもたちの自主性涵養、また、保護者との連携を図るといった認識が希薄であることが認められた。

(7) 文部科学省「幼児期運動指針(ガイドブック)」との比較に於いて、学生の「回避意識」には、危険で怪我や事故を誘発する可能性のある計画を行うべきでないという認識が具備されており、ガイドブックの内容と一致していることが明らかになった。

5. 引用文献・参考文献

- 1) 山本章雄(2022)「幼児体育における教育内容の検討(1)事例研究:学生の幼児体育実施における目標意識について」神戸教育短期大学教育実践研学省究紀要,第4号,pp14-23.
- 2) 文部科ホームページ(2012)「幼児体育指針」<http://mext.go.jp/index.htm>
- 3) 桐川敦子(2019)「保育園・幼稚園のわくわく運動あそび」成美堂出版,p.127.
- 4) 柳澤秋孝他(2014)「こころとからだがかすかすく育つ0~5歳児の発達に合った楽しい運動あそび」ナツメ社,p.255.

- 5) 富本靖(2017)「幼児期の運動遊び、児童期の体育が成長に与える影響」学苑・昭和女子大学初等教育学紀要, No.920, pp52-60.
- 6) 青木好子(2016)「幼児教育における身体活動の意義と課題」佛教大学大学院紀要教育学研究科篇, 第44号, pp1-18.
- 7) 前橋明(2015)「元気な子どもを育てる幼児体育」保育出版社, p.186.
- 8) 文部科学省幼児期運動指針策定委員会(2012)「幼児期運動指針 (ガイドブック)」文部科学省, p.60.

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は幼児体育の計画立案における学生の意識調査を行い文部科学省の「幼児期運動指針」と比較検討する中で客観的に分析し、学生の課題について新たな知見を提言しておられる。これからの教育カリキュラムの策定や教育活動において改善が求められる内容であり、多くの教員が共有すべき内容である。また本調査を運動系の大学生に行い比較検討することでさらに広範囲な研究結果が得られることが予測される。本論文の研究結果は、学生が幼児体育の計画立案を学修するうえで貴重な資料であり、学習成果を向上、展開するために必要な視点であると考えられる。(担当：藤井裕子)

名画に挑戦！

—初年次教育における協同制作の取り組み—

辻本 恵

TSUJIMOTO Megumi

本学では本年度より初年次教育が卒業必修科目として設定された。初年次教育とは保育者養成校として、大学での学びを充実させるための主体的な学習態度や技術を身につけ、学びの礎となる人間関係や保育者として必要な一般常識などの獲得を目的とし設定されたものである。その授業の一環として、「名画に挑戦！」と題し、協力し合って一つの作品を完成させる模写による協同制作を行った。

本稿では本年度に実践した「名画に挑戦！」の授業について、その授業内容や指導方法を報告するとともに、事後の振り返りアンケートから学生が授業から得た学びについて、授業実践報告をしたい。

キーワード：初年次教育、保育者養成、協同制作

1. はじめに

これまで本学の初年次教育は2019年に「ワタシノミライ」として始まり、新入生に対しさらに充実した内容になるよう2020年には初年次教育として位置づけ、大学生活への円滑な移行と今後の学習への基盤を学ぶ授業を設定していたが新型コロナウイルスの影響により未開講となった。2021年は対面授業と遠隔授業を併用するなどの対策をとり拡大防止に努めながら、授業を行った。しかし単位認定が選択という科目の履修条件等から受講生が少ないという実態があった。学修事項及びその意義の重要性から、科目の見直しを行い初年次教育は2022年度より卒業必修単位となり、1年次にすべての学生が受講することとなった。

教授内容を再編するにあたって、拙者を含む3名の教

員によりプロジェクトチームが編成され、初年次教育のシラバスを作成することとなった。

近年多くの大学において、初年次教育として学科の特色を生かした内容を展開している。本学は保育者養成校であり、保育現場の必須技能である「音楽」「体育」「造形」の基本3技能を中心とした「専門教育」をベースにカリキュラムが組まれている。初年次教育でもこの特色を活かし造形活動を通した授業を設定する。

文部科学省中央教育審議会大学分科会制度・教育部会(2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」の中で初年次教育とは「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生となることを支援するプログラム」として説明している。また鈴木・松本(2022)は「大学の早い

段階ですべての学生が能動的・主体的に学修と向き合えるよう、初年次教育において動機づけと意識の改善を働きかけていくこと」が必要であると述べている。これらを踏まえて保育者養成校である本学の初年次教育においては学生が本学で学ぶ意義・目的について考え、「大学での学びを充実させるため必要となる主体的な学習態度や技術を身につけ、併せて、学びの礎となる人間関係醸成や保育者として必要な一般常識、生活態度の獲得を目指す。」を初年次教育ポリシーとし、学習意欲と主体的な学びの基礎作りをすることで、一人一人の学生生活が充実したものとなるよう「心を育てる」をテーマに全体の授業計画を立てた。

以下に2022年度の初年次教育の「授業のテーマと概要」、「到達目標」を掲載する。

授業のテーマと概要
<ul style="list-style-type: none"> ・入学時の不安を解消し、仲間と共に学んでいく場であることを認識する。 ・レポートの書き方、論文の書き方、文献資料検索の方法を学ぶ。 ・大学生としてのマナー、常識・生活態度を身につける。 ・夢に向かって進む意欲を確立する。
到達目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育者として必要とされる社会性を習得し、好ましい人間関係を形成するために活用することができる。 2. 短期大学での学習に必要とされるスタディスキルを習得し、学習に生かすことができる。 3. チームで協調して課題を解決することができる。 4. 将来の夢を自ら構築することができる。

本稿で取り上げる「名画に挑戦！」は上記に示した到達目標3.のチームで協調して課題を解決できる に焦点を当てることとし、「仲間と共に学んでいく場であることを認識すること」を授業テーマとして実践した。

2. 題材設定

「名画に挑戦！」はピカソの「泣く女」の模写をクラス全員で完成させる協同制作を行う活動である。

1973年に制作された「泣く女」は、赤・青・黄・黒など鮮やかな色合いと強い線が特徴の油彩画である。このような描写の特徴は、クレパスのやわらかくのびがよいこと、画面の上で混色ができ鮮やかで美しい。また重ね塗り、厚塗りができること、クレパス特有のやわらかさがマチエールになって油絵のような表現が可能である（サクラクレパスHP）といった特質を生かすことができる。

学生は入学後保育士資格必修科目として造形表現Ⅰを初年次教育と並行して受講している。造形表現Ⅰでは主な活動として子どもの造形活動で用いられる様々な材料の教材研究を行っている。クレパスはその太さや描き心地のよさなどから子どもの描画活動にふさわしい材料として使用されることが多いため造形表現Ⅰでも使用頻度の高い材料であり、学生はすでにクレパスの特質を生かした造形活動を何度か体験している。

また初年次教育で与えられた1コマ90分という時間の中ですぐに取り組むことができる特質を持ったクレパスは適していると考えられる。

さらに今回の模写は1人の学生が1枚の絵の1部分を小さな紙に描く。それぞれに描いた絵を持ち寄って1つの作品に仕上げしていく。クラス全員が互いに助け合い、協力し完成させていくことは円滑な人間関係の構築と主体的な学びの基礎作りが期待できると考えた。そこでピカソの「泣く女」をモチーフとし、各学生がそれぞれのパートを担当、最後に全員で自クラスの「泣く女」に仕上げるといった協同制作を取り上げることとした。

その活動を通して学生が何を感じ、学びとったのかを振り返りアンケートの結果から分析し、初年次教育における協同制作について考えてみたい。

3.方法と制作過程

対象者

本学こども学科「初年次教育」受講者 126名

実施期間

2022年5月11日～5月25日

実施内容

準備物：ピカソ「泣く女」のコピーを36枚に分割した

もの、クレパス、16切・32切画用紙

以下に「名画に挑戦！」の過程を示すとともに学生の反応を記す。

1) 32切画用紙各1枚を学生に1枚ずつ配布する。クレパスで画用紙に自由に絵や模様を描く (5分)

通常授業と違い、他のクラスとの合同授業で教室も大きく学生数も多い。慣れない環境の中での緊張感をほぐし造形活動に向かうために「ミッション1」として、今までどのようなクレパスの使い方や工夫があったのかを思い出しながら好きな色で自由に点や線を描いたり面を塗ったりするよう伝えた。

2) 36枚に分割した「泣く女」のコピーと16切画用紙を学生に1枚ずつ配布する。

クラスごとに1枚の絵を36枚に等分に分割したものを無作為に配布していく。あらかじめ分割されたコピーの裏に番号をふっておき、その番号を画用紙の裏に記入しておく。

ここでは学生はいったい何が始まるのか、この紙をどうするのかといった不安げな様子やこの絵を描くのだなとワクワクしている姿が見られた。

3) コピーの絵を拡大して画用紙に模写する (40分)

「ミッション2」として16切の画用紙にコピーの絵をクレパスの使い方を工夫しながら拡大して描くことを説明した。

教員が実際に模写を行ってやり方の例を示すと、自分なりに模写の方法を考えて何本も引かれた線（実際には髪の毛）を数えたり、手で幅を測ったりコピーを折って角度などを確かめるなど工夫して写していく姿が見られた。

「難しい」「無理」などの声をあげた、とまどいの見られる学生には声掛けを行う。このとき隣に座っている学生にも一緒に見てもらい、互いにアドバイスしあえるような関係づくりを心がけるよう伝えるとともに、学生自身が教材への関心を深められるようにした。

形だけでなく、色にも注意してよく見ることを伝えると色の重なりぐあいや1本の線でも筆致が違うことが見

えてくることや、同じ色でもそれぞれに感じ方が違い、表現の仕方も変わってくることなど、学生同士での会話の中からお互いの気づきを確認め合う様子がうかがえた。またぼかしやスクラッチなど様々な技法を活用する姿もあった。

学びあい、教えあう姿勢を協力と捉えて、こちらから声をかけることはせず、見守るようにしている。

4) 出来上がった画用紙を裏向けて順番通りに並べてつなげていく。

仕上がった学生の1枚1枚の作品をつなげるとピカソの作品「泣く女」の模写作品になることを告げる。

すでに予測していた学生やびっくりした様子の学生もいる。自分の描いた絵がどの部分になるのか、隣の作品とぴったり合うのか不安げな様子も見られた。

「ミッション3」はクラスごとに協力して1枚の絵に仕上げていく過程である。画用紙を裏返して番号順に並べてテープでつなげていく作業である。すべてのクラスにおいていくつかのパーツに分けてつなぎ、最後に1枚にする方法で絵をつないでいた。貼り合わせるときにはお互いの番号を見せあって、「～番の人は？」や「〇〇さんはここ」など指示する学生や作業がしやすいようにテープを先に切っておく学生もおり、その姿を見てほかの学生も自らできることを考え行動し、協調することでクラスの輪の広がりが感じられる場面であった。普段はあまり話さないクラスメイトとも会話が進んでいる様子である。どんなふうになら仕上がっているのか早くつなぎ合わせて見てみたいというワクワク感やドキドキ感が感じられ、協力することを一層強めているようである。

5) 鑑賞

クラスごとに仕上がった作品を掲示して鑑賞する。掲示したと同時にスマートフォンでの撮影が始まった。本来であれば注意するところであるが、作品への興味・関心への表れであるにとらえ鑑賞の一環とした。

作品の近くへきて「ここはうまくつながっている。」「つながってなくても遠くから見ると、それらしく見える。」「ここすごいね、誰が描いたの？」など友達同士で感想を述べている姿も見受けられた。

「ミッション4」は各クラス数名の代表が絵を見て一

言コメントする。多かったのは「すごい」「面白い」「素晴らしい」など絵から強く感じた印象のコメントや「芸術的」「大きい」「独特な顔」「カラフル」など色や大きさ、形といった造形的要素に関するコメントであった。ほとんどが肯定的な発言であり、出来上がったものから達成感や満足感を得ていることがうかがえる。

授業終了後には作品の周りに集まってそれぞれの表現の違いをじっくり鑑賞する姿もあった。

4. 振り返りアンケートの記述

「名画に挑戦！」の活動を振り返り、以下のような記述を求めた。

- ・体験して学んだこと、気づいたこと、感想など

振り返りアンケートを実施するにあたり倫理的配慮として研究の趣旨や個人情報への順守などを説明し承認を得、105名の記述内容を対象に分析を行った。

分析にはユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp>) を用い、記述内容から頻出語を抽出し、共起キーワード図を作成した。(8. 付録を参照)

共起キーワード図とは文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図で、出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画される。

アンケートの共起キーワード図には絵を中心とした語句のネットワークが7項目形成された。そのうち絵を描くーすごいー思う、絵ーわかるー合わせるー感動、絵ーつなげるー36枚ー集まる、絵ー面白いークラスー違う、の4項目に強いつながりがみられた。また、つながりは弱い、違うー見えるー色ー混ぜる、1枚ー画用紙ーつくー想像、1つー作品ー完成、の語句の集まりも見られた。これら絵を中心としたネットワークから①すごい絵が描けたと思う②36枚の絵を集めつなぎ合わせた③絵を合わせたらどのような絵かわかって感動した④クラスによる絵の違いが面白い⑤混ぜ方によって色の見え方が違う⑥1枚の画用紙に描いた絵をつなげるなんて想像もつかなかった⑦1つの作品が完成した、と推測した。

その他の語句では、クレパスー薄いー濃いー混ぜる、協力ー楽しい、それぞれー個性、良いー細かい、紙ー小さいー大きい、作るー難しいー楽しさ、うまいーつな

る、の共起がみられた。これらは⑧クレパスは薄く、濃く描いたり、混ぜたりができる⑨協力することは楽しい⑩それぞれに個性がある⑪細かいところが良い⑫小さい紙が大きくなった⑬作ることは難しいが楽しさもある⑭うまかつなつなつた、のように読み取ることができる。これらの内容をカテゴリー別に分けたところ以下の表に示すA (⑤、⑧、⑩、⑪、⑬) B (③、④、⑥、⑨) C (①、②、⑦、⑫、⑭) の3つに分類することができた。

表1

A	教材 (クレパス) や造形に関する学び・気づき
B	1枚の絵に仕上げることで得られる学び・気づき
C	完成作品についての感想

表1に示した3カテゴリーに書かれた内容を、原文を損ねない程度に要約したものを以下に示す。

A 教材 (クレパス) や造形に関する学び・気づき

- ・色を混ぜて作ることによって新しい色を作り出すことができる
- ・クレパスは薄く塗ったり濃く塗ったり様々な表現が可能である
- ・対象をよく見ることでたくさんの色が使われていることに気づいた
- ・人それぞれに表現の仕方があり個性がある
- ・明るい色から塗ったほうが濁った色になりにくい
- ・拡大して描くときはバランスに注意すべき
- ・クレパスは塗り込むことで油絵のような表現ができる

B 1枚の絵に仕上げることで得られる学び・気づき

- ・自分が描いたのは一部だがみんなの絵を合わせると大きな一つの絵になって達成感があつた
- ・このような経験がなかったので新鮮な気持ちになることができた
- ・団結力が生まれクラスの仲が深まった
- ・皆で力を合わせて作り上げることの楽しさ、面白さ、うれしさ
- ・みんなで一つの物を作ることは素晴らしい
- ・同じ絵なのにクラスによって全く違う絵になっているところが面白い

C 完成作品についての感想

- ・ぴったり合っているところ、ずれているところ、どちらも面白い
- ・つなぎ合わせたとき、きれいに仕上がっていて感動した
- ・完成した絵がすごくてびっくりした

振り返りアンケートとともに全員に「作品を見て一言！」を記述させたところ、「みんなよく見て描いている」や「個性的」「同じ絵（の部分）を見て描いているのにそれぞれ個性がある」「同じ絵を描いているのにクラスによって違う」「人それぞれ違うのに1つの絵になるところが面白い」など、学生個人やクラスそれぞれの表現に関する気づきや「協力感を感じた」というコメントなど、完成に至るまでのプロセスの中で感じたことへの記述の傾向がみられた。

5. 総合考察

今回の「名画に挑戦！」は「造形」部分と「協同」部分の2つの活動に分けて授業構成をし、学生自身が「今、自分が何をしようとしているのか」を明確にできるように試みた。ほとんどの学生が表1の内容が示すような「造形」と「協同」両面での気づきを記しており、それぞれの活動への積極的な取り組みがうかがえる。特に「協力」「楽しい」「クラス」「違う」「面白い」などの言葉の表出からは表現の多様性を認めながら互いに協力することへの理解が読み取れる。

振り返りアンケートに「みんな協力して1つの作品を作り上げたことに意味があった。」と記述した学生の意図からは協同制作が、大学が仲間と共に学んでいく場であることへの気づきのきっかけとなることを示唆している。また、「番号順に並べることは仲間を探して森の中から抜け出して友達を見つけた気分だった。」の記述内容からは仲間とともに問題を解決しようとする態度が読み取れ、保育者として必要とされる社会性の習得の一手ともなり得ると言えよう。

こうした振り返りアンケートの記述から、協同制作「名画に挑戦！」の授業は初年次教育の到達目標にそったものであり、一定の成果が得られたと思われる。

6. おわりに

今回の授業を通して、クラス全員で一つの絵に仕上げるといったクラスの中での自身の強い使命感が、目的意識を高めるとともに仲間意識を高め、主体的な活動を生むきっかけとなることが確認できた。さらに模写をすることが対象をじっくり観察し自分なりの表現を試みる活動となり、教材研究を深めるために有効かつ表現の多様性に気づく機会となることが分かった。

「名画に挑戦！」の設定は造形的な知識や技術の育成だけでなく、大学が仲間と共に学んでいく場であることを認識し、クラスで協調して課題を解決できる力を主体的に培うことを目的としていることは前述のとおりであるが、90分という短い時間の中でも主体性を発揮しクラス全員で完成までやり遂げたことが高い満足度、達成感につながったと考えられる。このような満足感や達成感を学生自身が授業で体験することが楽しく大学に来られる工夫の一つとなるのではないだろうか。

また絵という形が残るものであったがゆえに協同することを強く意識したとも言える。残念なのはそれぞれの個性や、クラス全体の絵としても思いもよらない面白さが出た完成作品を紙面上に載せることができないことである。これは著作権上の問題が発生するためであるが、今回のような方法を用いるのであれば次回は作品を選択する際に考慮すべき点として重要である。

今後は本学の特色を活かしつつ、さらに学生の主体的な学びを支え、円滑な人間関係を築くことのできる効果的な初年次教育授業を提供できるように実践を重ねながら検討していきたい。

7. 引用文献・参考文献

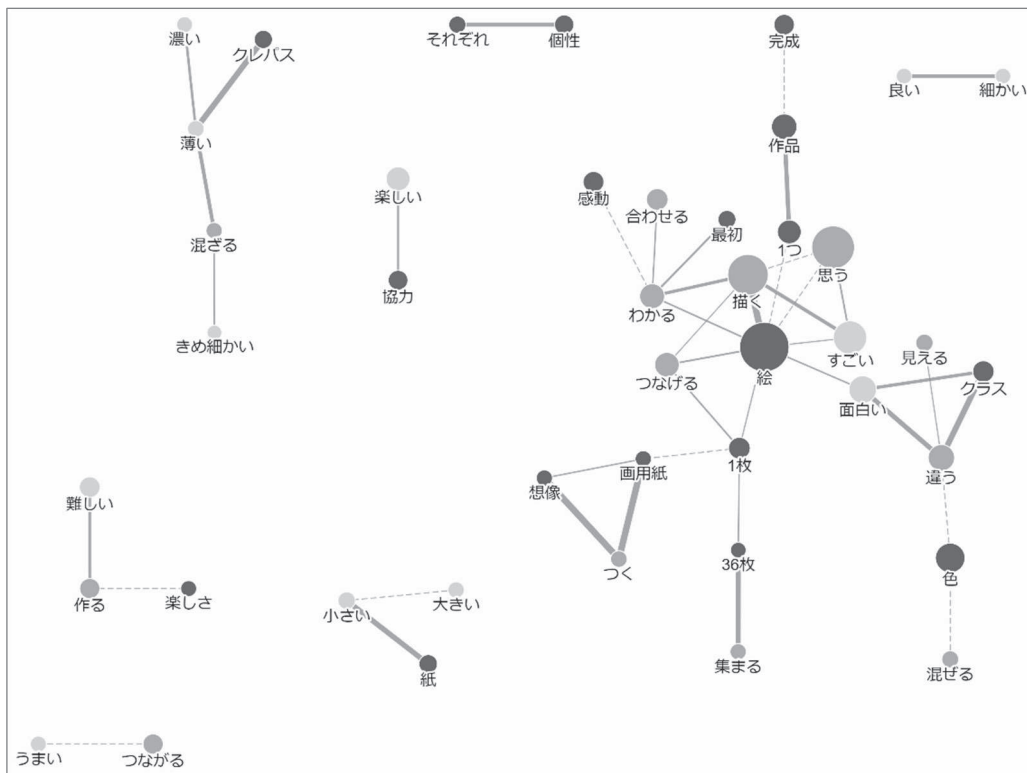
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」
- 鈴木 崇夫・松本 美紀 (2022) 「「用語の定義を調べる」過程のふりかえりから自律的学修を促す初年次教育の試みーアクティブラーニングの効果に着目してー」愛知淑徳大学初年次教育研究年報7
- 鷹木 朗 (2018) 「アクティブ・ラーニングで色彩の扉を開く」京都市立芸術大学美術教育研究会第378回研究センター例会
- ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp>)

8. 付録

頻出語

単語	出現回数	単語	出現回数	単語	出現回数
絵	120	きれい	17	皆	7
思う	78	難しい	17	混ぜる	7
描く	72	つながる	16	分かる	7
できる	40	作る	16	画用紙	6
色	52	紙	14	見本	6
すごい	52	クレパス	13	きれいな	6
作品	38	塗る	13	想像	6
面白い	36	最初	12	つく	6
違う	33	いい	11	いく	6
1つ	32	1人1人	9	薄い	6
わかる	29	ピカソ	9	芸術	5
つなげる	28	それぞれ	9	楽しさ	5
楽しい	26	ずれる	9	びっくり	5
1枚	25	よい	9	1人	5
クラス	24	達成感	8	混ざる	5
感動	22	最後	8	集まる	5
完成	21	感じる	8	見る	5
合わせる	20	見える	8	組み合わせる	4
協力	18	小さい	8	濃い	4
個性	17	はじめ	7	うれしい	4

共起キーワード図



ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は初年次教育における学生の主体的な学びを通して、新入生同士の関係性を構築するために、「造形」と「協同」の活動を用いた体験型チームビルディングの実践報告である。事後の学生の振り返りの分析では、一つの作品の模写をクラス全員で完成させる共同制作から、学生同士が表現の多様性を認めつつ、互いに協力することへの気づきや大切さを考察している。保育者養成に求められる協同性や円滑な人間関係の育成に、本実践報告の知見が共有されることを願っている。(担当：川谷和子)

<執筆一覧>

神戸教育短期大学 こども学科

教授 山本 章雄/スポーツ科学 (スポーツ教育学)

神戸教育短期大学 こども学科

准教授 辻本 恵/芸術学 (彫刻)

<ピアスーパーバイザー一覧>

神戸教育短期大学 こども学科

教授 藤井 裕子/心理学 (発達心理学)

講師 川谷 和子/教育学 (幼児教育・臨床教育)

神戸教育短期大学「教育実践研究紀要」

第5号 (2022)

2023年 3月 31日発行

編集発行：神戸教育短期大学

ファカルティ・ディベロップメント委員会

〒653-0862 兵庫県神戸市長田区西山町 2-3-3

TEL:078-611-3351 (代表)

イワサキ出版印刷有限公司

〒650-0027 兵庫県神戸市中央区中町通 4-1-17

TEL 078-367-6556

